

遠藤周作

「アデンまで」論

A Study of Aden made by Shusaku Endo

中野 恵海

はし が き

筆者は遠藤が「沈黙」（昭41・刊）を発表したのを機会に小論ではあるが「遠藤周作論」を纏めてこの研究論集（第十六巻・昭44刊）に発表した。その後作品を読み返したりしているうちに考えた事どもを一応、処女作「アデンまで」に限ってまとめてみることにした。勿論、前稿と重複するところが多く出て来て無様なようにも思われたが、これはこれで纏まって理解がとどき易いようにしたいとも思ったので、かまわず叙述してみた。御諒承がいただきたいところである。

それからこの稿に於て、筆者の胸中に常に往来したのは、作家とその処女作とのかかわりという事であった。既に云い古されたことであるが、処女作はその作家を決定する、或は少しハイカラに、作家は処女作に向って成熟する、という事が今度も沁々と思われたのである。その作家の文学的特質が既に処女作に於て、然も萌芽の形に於て

みとめられ、捉えられるという点に於て、処女作研究の大きな価値がある。遠藤は昭和55年「侍」を発表した。処女作以後二十六年を経た作品で、この間に遠藤は小説家として華々しい門出をし、日本に珍らしいカソリック作家として幾多の問題作や傑作を発表し日本文壇にゆるぎない位置を占めるに至っている。その彼の最近作ともいふべき「侍」の中に、既に「アデンまで」に現われている幾多の文学的特質を見出して私は感慨深かった。例えば、「侍」に於て、キリスト教は果して日本人に受け入れられるか、という深い疑問が提出され、執拗に問われつづけるのであるが、この問いは、既に「沈黙」に於て一つのテーマとして正面から採り上げられている。然しこの「疑問」は早く処女作「アデンまで」に於て、萌芽の形で存在するように私には思える。又「幻影」なる言葉は「アデンまで」ではさりげない形で出されているように見えるが、翌年書かれた「白い人」（芥川賞受賞）に於ては、その意味が拡大され、現実を偽るもの、まやかしの信仰、というふうになり、遂に一篇のテーマがこの幻影、つまりすべて幻影を

抱いて生れ、幻影を抱いて死ぬ人間に対する復讐という事になっている。この幻影の語が「侍」の中で一箇所出て来る。

——長い間、幻影に引き摺られ続けてきた旅は今、終りを告げようとしていた。

という文章であるが、私にはこの幻影の語が単に偶然に国語辞書的な意味のみでここに使われているように思えない。ここは矢張り現実や真実を直視出来ないで幻影を見つづけざるを得ない人間の悲劇性や、哀しさが深々とこめられているように思われる。

一、執筆まで

全くの常套手段と云うべきだが、彼の処女作執筆に至るまでの生い立ちを一瞥したい。彼は大正十二年三月、東京生れで、(本年、昭・五十六年、数え五十九歳)父は遠藤常久、母の次男であったが周知の如く父の転勤の為、大正十五年に家族と共に大連に移住し、のち両親が不和となった為、毎日暗い気持で通学したという。昭和八年には父母の離婚により、母に連れられて日本に戻り、神戸市六甲小学校に転校している。後年の作品「船を見に行こう」(小説中央公論・昭三五)「童話」(群像・昭三八)などはその彼の幼少年時の在満中の体験がもとになっていると思われる。勿論、遠藤文学の特質としてそこには多分に誇張や歪曲のあるのは当然であるが、これ等の作品の基調は暗く陰鬱で、遠藤文学の特徴として彼が好んで背徳、偽瞞、変態、挫折、裏切りなど人間性の弱点や暗黒面を題材として採り上げている事

と一脈通ずるものがあると思われるのである。

神戸の伯母が熱心なカトリック信者でその伯母や母に伴われ、夙川の教会に通いはじめ他の子供達と共に公教要理をきいたのが彼のキリスト教との初めての邂逅であった。昭和十年には洗礼を受け、ポールという洗礼名を貰っている。この洗礼については、神を求める信仰の心などは無く、母もろ共厄介ちがひになっている伯母に対するおべっか心からであったなどと彼はやや自虐的な口調で回想したりしているが、最近作の「侍」(昭・五五)では受洗を人生の重大事として描いているように見える。そしてたとえ受洗した人間の側でどんなに軽く、無自覚にこれを扱おうと、神の側でこのつながりを打切られることは無い、という風に受けとめている。のちの三浦朱門との対談に際しても、三浦が「受洗するというのは、動機が打算的なものであろうと、本当に深く考えたものであろうと、実はたいした違いはないと思う」と云ったのに対し「今の僕はそう思っているよ。君が洗礼を受けたのは、自分で選んだのだからいわば恋愛結婚。僕なんか子供のときからの許婚だよ。見合だろうが恋愛だろうが結婚というのは結局同じだ、というのと同じように、洗礼だって人にさせられようが自分の意思で選ぼうが大差はない、ということはこの二十年ぐらい少しづつ解ってきたからね。」と答えている。

六甲小学校を卒業した彼は同じ昭和十年には灘中学に入学した。夫婦生活に失望した、勝気で情熱的な母は、息子を、信仰や生き方に信念を持つ男性に仕立てようとする。このような母に対する反抗的気分から、意識的に勉強を怠り、一八八人中一八六番の成績で灘中学を卒

業（昭・十五）したとは彼の告白である。年譜によれば浪人生活三年を経て、慶応文学部予科に入学（昭・十八）とあるが、灘中を出ての浪人三年間の生活は苦しかったろう。然も世は戦時体制で授業は殆んど行われず、川崎造船工場での勤勞奉仕が学生々活であった。工場作業の間にフランス語を勉強し、マリタンヤリルケを読んだという。カトリック哲学者の吉満義彦の舎監をしている学生寮に入り、その紹介で昭和十九年には堀辰雄を訪ねたりしている。昭和二十年には徴兵検査を受け、第一乙種だったが、肋膜炎のため召集延期となり、入隊せぬまま終戦を迎えた。（不幸つづきの彼にとって数少ない幸運の一つといふべきである。）佐藤朔の「フランス文学の潮流」を読んだのが動機となり仏文科に進学したが、つまりはこれが彼の文学開眼となつた。そしてモウリヤック、ベルナノスなどの現代仏蘭西カトリック文学を読み始める事になつたのである。

昭和二十二年、同級生に託したエッセイ「神々と神と」が神西清の目にとまり、角川発行の「四季」に掲載され、又評論「カトリック作家の問題」が母校の「三田文学」に発表され、つづいて翌年には評論「堀辰雄論覚書」が「高原」に、評論「此の二者のうち」「シャルル・ペギーの場合」が「三田文学」に発表されている。ここで彼は丸岡明、原民喜、山本健吉、柴田鍊三郎、堀田善衛、など三田文学の先輩達を知つたのであつた。昭和二十四年に慶大を卒業し出版社鎌倉文庫の嘱託となつたが営業不振のため同社はまもなく潰れた。この年、「精神の腐刑―武田泰淳論」を「個性」に発表している。

昭和二十五年、一月には「フランソワ・モウリヤック」を「近代文

遠藤周作「アデンまで」論

学」に発表した。七月には戦後最初のカトリック留學生としてフランス現代カトリック文学研究のため仏国船マルセイエース号の四等船客となり渡仏、リヨン大学に学びつつ、モウリヤックを熟読した。とくにその代表作「テレーズ・デスケイルウ」は幾度も読んだという。（後年、彼自ら、翻訳もしている）「リヨンの二年半の生活はいささか苦しかったが、小説家にならうとしたのはこの時なり」とは彼の熱っぽい告白である。

昭和二十八年帰国した彼が早速に小説「アデンまで」を書き上げ「三田文学」に発表した。時に昭和二十九年彼は三十二歳であつた。以上に於て私の注意したい点を挙げれば次の二点である。

その第一は、現実生活における挫折、という事である。両親不和の原因とする家庭の暗さに閉され、色の黒さからクラスの者からカラス、カラス、とはやし立てられたりした幼少年時代、そして母子家庭となり青年期を迎えてからの三年間の浪人生活、そして戦時中のアルバイト学生々活、勤勞奉仕。卒業後の入社後間もない鎌倉文庫の倒産まで加えて、彼の人生は全く陽の当らぬ、恵まれぬものの典型である様に見える。繰り返すが、この体験が影を描いて光をおもわせるというモウリヤックの手法に強い共鳴を覚えさせ、常に弱者、敗者の側に立つ遠藤の文学の本質につながっている。

その第二は彼が文学のはたけで活動し出したのは小説家としてではなく、批評家としてであつたということだ。知性、理性が何より物を云う世界が批評というものである。純文学は勿論の事、ユーモア小説を書き、ぐうたら哲学を説く狐狸庵先生にも、その根のところに

この批評精神が光っているのである。遠藤文学に批評精神、そして理性的要素や合理主義を強く認めるべきであるということを私は云いたいのである。

二、モーリヤックの手法について

青年期に文学開眼を覚え、フランス文学を読みはじめた最初から遠藤にはモーリヤックに関心が持てたが、真の邂逅とでもいうべきものが昭和二十五年渡仏後のリヨン大学に学んだ時であった事は前述の通りである。彼が今迄の批評家生活から轉身して、作家になろうとし、その手法を学んだのがモーリヤックであったという。ではそのモーリヤックの手法とは何か。それを述べてみたいと思うが、それは一言で云えば、「影を描いて、光を想わせる法」である。絵画で云えば、より適切になろうが、影を描くことによって、光そのものを表現する技法である。譬えば、「睡蓮・水の風景連作」四十八点を狂気の如く描いたクロード・モネは、「私は不可能と挑戦しています」と友人に書き送り、この「不可能」とは光を描く事だと云い、光を直接カンバスに表現し得ない彼は、遂に我が庭の池の睡蓮を描くに至ったのである。睡蓮を描き、水面を描き、水中にゆれ動く水藻や水底にゆらぐその影を描き出すとき、彼のカンバスには光の種々相、その生相が現れる。影を描くことによって直接には描き得ない「光」をカンバスの上に表現する、これがモネの手法であったのである。仏教の他力教での罪の意識の説明が連想される。それは月の光と影との説明である。こ

の説明では途行く地上に落ちる我が影は我が罪の影であり、つまりは罪の意識といってもよい。そして頭上の月の光は神であり、それは仰ぎ見ずとも感じられるものであり、影の濃さは光の強さを思わしめるのである、と。人に生れる罪業の影を描いて、文章の上に、そして文学の上に表現する事の不可能な「神」を描かんとする手法こそが、モーリヤックの手法というものである。遠藤はこれを学んでカトリック作家となった。好んで陽の当らぬ処に身を置き、常に罪科や屈辱の中から光を憧憬するという姿勢、これが遠藤文学の基調である。

三、解釈上の問題点

「アデンまで」を読み始めて誰しもがまず気の付く事は、行文が非常に緊張し、使用される漢字など妙にこむずかしいという事である。例えば、埠頭、黄昏、顛顛、黎明、翳、などがそうであるし、掌と、手とを使い分けたり、船のエンジンの音が脚もとから伝わるというふうに漢字使用に気を使っている。処女作という事から来る作者の緊張ぶりが思われる事であるが、十年を超える批評家として文章上の修練を経た遠藤の筆は初めから達者で、リアリズムを基調とするものではあるがたとえば「アフリカの太陽は東からこの海を押しつけていた」と云ったふうの横光利一式新感覚派的な表現が二、三見られたりもするのである。以下「アデンまで」の文章表現の諸点について少しく述べてみたい。(引用文の頁数はすべて講談社文庫本によった)

1 「夜があける」について

作品の初めの方に

——「夜があける。女があけるのだナ。」と

俺は考えた。(頁一五三)

という所がある。この「女があける」の意味が解らない。夜が明けゆく、この夜の帳を、女が開けるのだな。というふうには解釈出来ない。男の別離に泣く女が、その別離を早めるようにあけるといふのも変である。夜が苦しいから早く朝にするといふのも余計理屈ばって変であろう。それで仕方なく次の如くむずかしく考えている。「女」といふものを所謂男性側から煩惱とか愛欲の代名詞の如く考えてこの「闇黒の愛欲の世」も明けて行く、この女との愛欲の世界ともオサラバだ。それがこの「女があけるのだナ。」という男の台詞であると、考えるのである。

2 「乾いている」「乾いた音」「眼の濁き」

——戸口のところで彼女の手を握った。その手は白く、乾いてい
る。……(頁一五四)

白人の女の手だから白いので、しめり気がなかったので「乾いてい
る」と書いたと云えばそれまでであるが、ここは別離にのぞんで涙も

涸れた、悲しみに打ちひしがれた女の手として、しっとりした情感と
かおよそ、ウエットな何物もなくしてしまった感じを出そうとした文
章のように思える。

——女は屏風のうしろで、ひそかに下着をはずしおとしている。そ
れは本当に砂のこぼれるような乾いた音だった。(頁一六〇)

女との初夜の情景描写なのであるが、「砂のこぼれるような」とい
う美しい比喻には思わず、啄木の歌「いのちなき砂のかなしさよさら
さら」と、握れば指のあいだより落つ」を思い出させる。乾いた砂だか
ら、さらさら落ちるのである。さてこの場合の音は砂の落ちる音だか
ら、小さい音、かすかな音をあらわしている事は勿論であるが、乾い
た音、という形容はどこから来るか。これは私は、この音、即ち下着
をはずしおとしている音を聞いている若い男性の羞恥心を表わしてい
るのだと思う。身内が熱くなる。それはかわきと同義語である。少し
オーバーになった気味があるが、単に小さいにとどまらない語気が
感じられてならない。

——なぜ、摸るのか、なぜ、この女を憎むのか……。打ちながら、
俺は眼の濁きを感じた。(頁一七五)

黒人の女を思わず摸りつける箇所描写であるが、夢中になり、カ
ツとなって血が頭にのぼり、熱くなったという描写である。そしてカ
ツと黒人女を睨みつける、眼に力がある、万感こめて女を睨みつけ
たという文意である。

以上、引用は、遠藤がこの処女作に於て漢字の使用に特別の心遣い

を見せているほかに、主として感覚的な描写にも一工夫して、新鮮な魅力を發揮している事に注意して貰いたいからである。

3 「赤いちぎれ雲」

——強烈な夕陽に色どられた砂漠の上には、漂白された藍色の空に赤いちぎれ雲がいくつか浮んでいた。俺はその雲をみながらパンをちぎり、それを食った。食いながら、俺はあの黒人の女が死ぬであろうことを考えた。ふしぎに、彼女の死は俺に俺の悲哀も起こさない。(頁一七七)

「なんの悲哀も起こさない。」とは書いているが、藍色の空に赤いちぎれ雲という風景は私に白秋の詩を連想させる。「空に真赤な雲のいろ／玻璃に真赤な酒の色／なんでこの身が悲しがる／空に真赤な雲のいろ。」(那宗門)そして「なんでこの身が悲しがる」と我が身を叱るが如き、たしなめるが如き表現は、悲哀感を嘯みしめる趣きである。であるから、この本文の「なんの悲哀も起こさない」という表現は何と解すべきか、明白であろう。譬えを引いてみたい。手足をすりむくと云った所謂、擦過傷は皮膚の表面的痛みで、どんなに烈しくてもそれは浅いものである。骨膜に達するような深い傷の場合、傷の周囲の表皮的なところは大きなショックの為に麻痺してすぐには痛みを感じないでいる事がある。この場合の日本青年の「心」に受けた痛みはまさに後者の深い傷に当るものではないかと思われる。そしてそれ

につづく次の文章、

——もう、ずっと昔から、彼女と船艙で出会う前から、俺には彼女がこの黄昏に死ぬであろうことを理解し、知っていたような気がする。(頁一七七)

とはどんな意味であろうか。これは彼女との出会いが運命的なものであったという風に解したく思っているが如何がなものであろう。「ここでこうして貴女とお会いする事が、今はじめてではなく昔から知っていたような気がする」と或る青年が云ったのなら、それは並々でない運命的な愛の告白になるのであり、「源氏物語」では光源氏が「宿世」の因縁という風な表現で愛の告白をしている。この本文にも並々ならぬ「つながり」が青年と黒人の女の間存する事を述べているのである。

4 「無数の灯、無数の生」

——マルセイユの街はもう、赤や青の灯々に夕靄のなかにうるんでいた。俺が最後にみるヨーロッパの風景だった。そしてこの無数の灯、無数の生にまじって、あの女も、どこかにいるに違いなかった。(頁一五六)

右の文中、「無数の灯」というのはマルセイユの街の灯なのであるから問題はないのであるが、すぐにこの「灯」を「生」に置きかえて「無数の生」と書いているところが問題である。ここで私は芥川龍之

介の「舞踏会」(大正・八)の中の一節を思い起す。

——明子と海軍将校とは云ひ合せたやうに話をやめて、庭園の針葉樹を庄してゐる夜空の方へ眼をやった。其処には丁度赤と青との花

火が、蜘蛛手に闇を弾きながら、將に消えようとする所であつた。

明子には何故かその花火が、殆悲しい気を起させる程それ程美しく思はれた。

「私は花火の事を考へてゐたのです。我々の生のやうな花火の事を。」

ここは花火の火ではあるがそれを直ちに「生」に置きかえていところが問題である。芥川には「或阿呆の一生」の「火花」に見られる「空中の火花」に対する心情や、「戯作三昧」の主人公馬琴や「地獄変」の良秀や果ては「奉教人の死」の「ろおれんぞ」の死にざまに於ける「恍惚とした法悦」に浪漫的憧憬とも云える心情が色濃く見られるのであるが、今、この「舞踏会」の花火の個処にも同種の憧憬が認められる。こう考へて、「我々の生のやうな花火の事を。」という行文が理解されるものと考えられる。さて遠藤が「マルセイユの街の灯」を「無数の生」と置きかえた心情のうちに、先行文学である、芥川のこの心情から発する感覚的な表現が強く作用しているように私には思われる。勿論、生(ヴィ・仏)は生命、生活の意であり、芥川の文学云々がなくても、ここは、マルセイユの夜の街の灯を見て、その中にまじって生きる女のことを思ひやうたという事で、意味はすらり通ずるようではあるが、この処女作で見せている漢字の使い方や新

遠藤周作「アデンまで」論

感覚派から学んだような文章などから或る種の緊張感が感じられるのであつて、これも芥川に「学ぶ」という感じが私にはされるのである。

5 「白」「ヨーロッパ」

①戸口のところで彼女の手を握った。その手は白く、乾いている。

俺がこの国で握る最後の掌だった。(頁一五四)

手が白いと述べる白色は勿論膚の色の白、つまり白色人種の白色を云う訳であり、「この国で握る」というこの国とは具体的にはフランスではあるが、テーマから考へてヨーロッパ大陸を指す。白人がつくり上げたヨーロッパ文化、キリスト教が指導原理となつて養成されたヨーロッパ文化栄ゆる国を意味するものであり、この文意はその白人の文化とは絶縁を告げる心情の籠つているところである。

②マルセイユの街はもう、赤や青の灯々に夕靄のなかにうるんでいた。俺が最後にみるヨーロッパの風景だった。(頁一五六)

③とぎれ、とぎれに、ふるいこと、巴里のこと……などが甦るが、それを繋ぎとめる力もない。(もうヨーロッパを離れたのだ。)

頁一五六)

④——これで遂にヨーロッパは終るのだ。(頁一五九)

②③④で云う「ヨーロッパの風景」「ヨーロッパを離れる」「ヨーロ

ツパは終る」と述べられる。「ヨーロッパ」は①に於て解説したが如く、重い、深い意味を持っていると考えられる。

6 「一匹の駱駝の歩む風景」

——だれも歩いていない。いや、一度だけ、俺は、一匹の駱駝が主人もなく、荷もおわず、地平線にむかってトボトボと歩いているのを見た。砂漠は広いので、駱駝はやがて小さくなり、遂には一点と化してしまふまで、見えていた。その風景は、俺の胸をせつないほど、しめつけた。なぜだか、わからない。(頁一七六)

この風景は、どう云う風景であるか。駱駝に主人が付いていないというが、命令者がいないというのは、身を束縛するものがない、ということ、身は自由であり、気楽であるとも云えるが、一種の虚しさや淋しさを感じさせる原因にも成る。荷もおわないということは、砂漠を歩む「目的」が取り去られることで前述の虚しさ、淋しさを助長するものであろう。我々を残酷に痛みつけるものに、拷問というものがあるが、その中に、無意味な事を無限にやらせるといふ事がその最たるものであると聞く。例えば部屋の入口に立って部屋内に向かって、手巾を振らせるといふ無意味な事を無限にやりつづけさせる、と、人間は発狂する、に至るとは心理学者の説くところである。したがってこの砂漠の風景(それは現実離れた風景で、作者がつづいて述べている如く一種の象徴的風景であるが)の意味するものは、結論的に

は、一種の地獄絵的風景であろうと思われる。何の地獄か。云わずと知れた、それは淋しさ、わびしさの極、孤独地獄を意味するものではないか。地平線という永遠に到達出来ないものに向って、ただひとり歩みつづけなければならぬことはそれに拍車をかける。今「俺の胸をせつないほどしめつけた」という。そして「なぜだか、わからない」という。何故だか明白に自覚されないながら、直感的にこの駱駝の姿は、とりもなおさず自分の姿であり、孤独地獄の風景は即ち「わが胸の中の風景」である事をアリアリと感じているという表現である。

——歴史もない、時間もない、動きもない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂のなかを一匹の駱駝が地平線にむかって歩いている風景、それはなぜか知らぬが、俺にはたまらない郷愁をおこさせる。俺にはその理由はわからないけれども、この郷愁は黄いろい肌をも

った男の郷愁なのである。(頁一七六)

前述の孤独地獄の思いを更に深めた述べかたである。「人間の営み」の総括的な意味は宗教、思想を含む人類の文化全体を意味するものであり、之を拒む「無感動な砂のなか」とは、現実的に何の作用も及ぼさない自然界、砂漠の世界の意であらう。「郷愁」とはノスタルジア、即ち他郷にある人が故郷をなつかしんで催すかなしみ(広辞苑)を云うのであり、「故郷」とは普通は、自分の生れた土地、或は生い育った土地を云うのではあるが、この文章ではまるでノスタルジアのような気持を湧きおこすというのであり、この孤独地獄の世界こそはわがふるさと、わが魂を慰むせる永遠の墓場、だとの意味である

う。そしてこの思いこそは白人から絶対的な、徹底的な拒絶と差別を受けつづけた黄色の肌をもつ男の郷愁だと述べることで、強くこの作品のテーマに繋がるのである。

四、「幻影」という語について

この作品中、「幻影」という語が使用されているのは次の4箇所である。

①——「ニホンで綺麗でしょうね。あたしお金があったら印度や日本に旅行してみたいな。」

部屋にちらかっている日本製の花瓶や人形などをいじくりながら、彼女は好んでフジヤマやサクラで彩られた国を想像した。ロチイを愛する年頃には侵略国家や軍国主義の日本は念頭にうかばぬ、俺としても女のそうした日本の幻影の上に逃れる方が安全であり楽でもあった。早怯にも俺は日曜など、ギメ美術館に彼女をつれて朝鮮やシナの陶器や仏像を念入りに説明してその幻影を砕くまいと試みた。

もとより時としてこの幻影を崩す事件もないではない。(頁一五七)

右の三つの「幻影」の語の使用状態をみると、国語辞書の解釈からすれば、つまりその本来的解釈からぬけ出て、多少広義の意に使われている感がある。即ち「幻影」の語義は広辞苑には①まぼろし ②虚

偽の現象・影像・状態・信念、または実現し得ない願望・理想などという、とあり、同じく岩波の国語辞典には「まぼろし。幻覚によって生ずる影像、心の中に描き出す姿。」とある。したがってこの本文での用法は、侵略国家とか軍国主義の日本とかいった現実の日本の姿に目をつぶった、フジヤマやサクラに彩られた甚だロマンチックな空想的日本の姿というような、非常に美化された姿、そして誤あやまれる日本に対するその見解を指して幻影と呼んでいるようである。つまり広辞苑の②で述べられた意味に該当するようである。そして次の

②——「あたしたちにチバを裁く権利はないわ。人間はみな同じよ。」

……「人種はみな同じよ。」女学生はイライラして叫ぶ。「黒人だって黄人だって白人だってみな同じよ。」

そうだ。人種はみな同じだ。そのうち女が俺に惚れ、俺がその愛を拒まなかったのもこの、人種はみな同じだという幻影があったからである。(頁一五八)

の引用に於て、膚の色の違いはあっても、人間はみな同じだという意味は勿論、基本的人權の立場に立つ発言であり、基本的人間の価値は変わらないという意味である。ところが本篇の主人公、日本の青年は白人の女と恋愛におちいってはじめてこの誤りに気付いたという文章である。つまりこの「幻影」の意味は専ら「誤れる見解」の意に使用されている。美化された、現実ばなれした甘い、誤れる見解の意という事で①の場合と共通する。

この作品に於て、幻影の語の使用はここぎりであるが、翌年ものされた作品「白い人」に於てこの語は重大な意味をもって来る。即ち幻影なる語は、まやかしの信仰を意味し、人間悪に気付かぬ軽薄さやうわべの善行らを指しているのである。心に消えぬ傷を持った本篇主人公の眼から見れば、世のあらゆる殉教者の心の中には英雄主義への憧れや自己犠牲の陶醉が見られる。彼はこの虚偽やまやかしが許せないのである。彼の加虐行為はこの幻影に向つてなされる。彼が踏みつけ、撲り、呪い、そして復讐しているのは、すべて幻影を抱いて生れ、幻影を抱いて死ぬ人間に対してである。実に「白い人」のテーマはここに存するのであって、それは遂に「幻影」に対する復讐物語とも呼ばれ得るものである。人間に根深く巢喰うこの幻影、この虚偽なるものを剔抉し、真実の「神」を仰ごうとするところにこの作品のテーマがあるのである。遠藤の初期の作品に於ける「幻影」の語の使用は重要である、と私は考える。遠藤文学の特質にそれはつながるからである。影を描いて光を暗示する。人間罪惡を描いて神を思わせるというモーリヤックの手法に発するからである。「アデンまで」に於ける「幻影」の語の使用法はそれを萌芽の形で私達に見せている。因みに②の引用文中の「チバ」の語はここ一箇所きりで、何か、人名だろうとは思いつながら意味不分明であるが、次の作品「白い人」では「千葉」という日本人の名が一箇所だけ出て来るので、この「チバ」は多分「千葉」であろうと思われるが、不親切な使用振りといわねばならぬ。

五、テーマについて

テーマを考えるに当って最も常識的に、この物語の筋を整理してゆきたいと思う。そしてそれは次のような部分に分けられるであろう。

- 1 俺がヨーロッパを去る時、愛人のフランス女が見送りに来た。港を前にした旅館の戸口のところで握手して別れる。船は三、四千トンの老朽貨物船で、与えられた四等船室は船艙であって、同室者は病人らしい黒人の女一人である——巴里のことが回想される。
- (一) 巴里のこと、別れた女のことか思い浮かぶ。パリで下宿した隣室の女であったが、最初の接吻の時俺は思わず「いいのか、本当に俺でいいのか」と叫んでしまう。そして膚の色の違いから来る劣等感が深々とひそんでいる事を直感する。
- 2 マクロニシ島が水平線のむこうに影を消してゆく。俺は先程のギリシヤの島の峰々に僅かに残っていた白い雪を覚えていて。
- (二) あの日も雪が降っていた。二人はリヨンに來た。ホテルの夜、鏡に映った二人の裸体の色の不調和さから、俺はいいようのない劣等感を覚えた。女の白い肉体の輝きに対して、黄色の俺はまさに醜悪だった。——劣等感が決定的なものとして更に深まった。
- 3 出発以來黒人女は、おおむけに横たわったままである。俺は目の前の黒い肌の色を醜いと思う。そして黄濁した色はさらに憐

れだと感じる。

(三) 雪の夜の翌日。偶然女の友人達に逢う。「愛だけでは充分ではない」「愛や理屈や主義だけでは、肌と肌の色の違いは消すことは出来ない。」俺は一人の青年の俺に対する憐憫れひんと同情とに対し陰險な憎悪と怒りにかられた。

4 夕暮になって、やっと白人の船医が看護婦がわりの中年の修道女を連れて船艙に來た。素直に診察させない黒人女ネグレスを医者ネグレスは撲る。女は罰を受けた家畜けちくながらにおとなしくなる。女は黄胆きたんらしい。二人は去る。女はつぶやく「このままでいいだ。黒人はみな、このままでいいだ。」

(四) 一昨々年、まだ女と会わなかった頃、友人と淫売窟に行つた事がある。黒人の淫売婦が白人の淫売婦から報酬を四分ノ一しか分けて貰えなかった。そして自ら、あきらめきつた調子で、「黒人だもん」と答えた。あの女たちにとって皮膚が黒いというのは単に黒いということではない。黒は実に「罪の色」なのだ俺は思う。

リオンから巴里に帰って、性の悦楽にうたれて女は叫ぶ「貴女は私の奴れいよ。奴れいになって」と、その時俺の感覚の中に、或る快感が——決して日本の女とは味わつたことのない——疼いたいた。それは単なるマゾシズムの被虐の快感ではない、おそらく、その背後には白色の前に黄色い自分を侮辱しようとする自虐感、その悦びがひそんでいる事を感じた。

5 葉を飲ませようとして俺は、素直にしたがわぬ黒人の女を、白

遠藤周作「アデンまで」論

人の医者がした如く撲つ。夜になって黒人女ネグレスは隔離室に入れられる。朝方、船はスエズ運河に這入り、俺はこの手記を書く。運河をはさんで茶褐色の砂漠があらわれはじめる。そこで一度だけ見た一匹の駱駝の姿は俺の胸をしめつける。——歴史もない、時間もない、動きもない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂のなかに一匹の駱駝が地平線にむかつて歩いている風景、それがたまたま郷愁をおこさせる。そしてこの郷愁は黄いろい肌をもつた男の郷愁なのだ痛感する。

黒人女は死んで、邪魔な荷物でも棄てられるが如く「水葬」される。この無感動な無表情な海に葬られる。白人達の祈禱は今や俺の耳には無意味な音ねとしか聞えない。ただ知っているのは、黒人の女は、いまは、もうそれら白人の白い世界とは無縁のものであり、死の後も裁きも悦びも、苦しみもないこの大いなる砂漠と海との一点となることだけであつた。

右はストーリーの要約である。個条書きにして明らかなように、1、2、3、4、5、は老朽貨物船上での現在の物語であり、(一)、(二)、(三)、(四)、はその物語進行中にさしはさまれた回想の部分である。そしてこの回想部分が密着して、それだけで一つの物語を構成しているところが特色のある点であるが、(その事については前稿で詳しく述べたので今は省略させて戴く)通覧して、この物語のストーリーはひどく簡単である。即ち、ヨーロッパを去ろうとして、巴里で知り合った愛人のフランス女に見送られて、ひどく老朽したアデン行きの貨物船

に乗り込んだ日本の一人の青年が、船室で一緒になった病気の黒人女ネグレスを見て、肌の色の違いということから白人種に対する有色人種の絶望的な劣等感におち込む、愛人の女にからまる肌の色の違いを中心とした回想がそれに重ねられる。そしてその劣等感から次第に自虐感へと進行し遂には脱け出し難き孤独感に陥ち込む。砂漠を行く一匹の駱駝という、孤独地獄の風景も、これぞ我が姿、我を葬むるに似つかわしい墳墓だと、これに郷愁すら感ずるのである。そして間もなく黒人の女は、白人達の手によって、まるで一個の品物の如く、無雑作に海に棄てられる。この時白人達の祈禱は、殆んど意味のない音としか俺の耳に聞えて来なかった、というのである。

一編の主題はひどく大きな問題をふくみ、途方もない独断がなされる。即ち、人間の肌の色は決定的で白人種は美しく、立派で正しく、黒人種はみにくく汚なく劣等邪悪であり、中間色の黄色人種は穢く、みじめで、この劣等感から永遠に脱し切れない。そして白人文化の最高、その指導精神であるキリスト教、そのイエスの愛も、黒色人や黄色人種にとっては無縁なものではなからうかと云う問いが提出されていく、と私には思える。

影を描いて光を憧憬するというモーリャックの手法をここに想起して戴きたい。そして肌の色の違いから来る劣等感ネグレスに陥ち込む青年の姿は、絶望的人生的設定である。だから「黒は罪の色である」という断定もこれは決して所謂人種問題に關しての思想や発言ではない。黒は罪の色、黄色は悲哀の色、というどうにもならぬ絶望感に沈まざるを得ない一黄色人種の青年の姿を描き、その孤独地獄の絶望的人生的感

概を叙すことに目的がある。そして勿論、その中から強烈に救済への希求が生まれざるを得ない事情を暗示する。そしてキリスト教よ、これでいいの。イエスの愛が絶望にうちひしがれたこの日本の青年やネグレスと無縁であつていいのかという叫びがここに生れる。

これがモーリャックに学ぶ遠藤の手法である。この作品の主題も又ここに存する、というのが私の考えであり、この作品をカソリック作家の作品とする根拠も又ここにある。

唯、日本人や日本の風土の中にキリスト教を受け入れぬ本質的何ものかがあるのではないか、という事に関しては後年の大作「沈黙」や最近作「侍」には正面切つて採り上げられるのであるが「アデンまで」ではまだその萌芽が認められると言うだけにとどまっている。この事は、前述した「幻影の語の使用法」の場合と同じく凡てが萌芽の状態で存することが処女作の持つ必然的特色として注目されるべきであると考えられる。

(昭・56・9・20・本学教授・国文学)